特別講演 1

長崎県の地域医療の現状と診療看護師（NP）
－ 2040 年の医療供給体制を見据えて －

八坂 貴宏 *Takahiro Yasaka*
長崎県病院企業団 長崎県対馬病院　院長

長崎県は全国一の離島県であり、これまでの 50 年間で、へき地・離島の医療体制構築、医療人材の確保・育成、ICT システム導入など、先駆的な医療政策を展開してきました。最近では、本土基幹病院からの派遣看護師や診療看護師（NP）の地域での活躍も進んできています。

今回、国内でも顕著な少子・高齢化、人口減少を迎える 2040 年の長崎県における社会情勢、地域医療構想を踏まえ、診療看護師（NP）の存在意義ならびに保健医療・看護介護を通じて、診療看護師（NP）が地域医療ならびに地域社会へどう貢献していくか、その方略を皆さんとともに考えてみたいと思います。

座長 **本田 和也**
国立病院機構 長崎医療センター 脳神経外科
診療看護師(NP)

座長 **和泉 泰衛**
国立病院機構 長崎医療センター
総合診療科　医長

特別講演 1

長崎県の地域医療の現状と診療看護師（NP）
－ 2040 年の医療供給体制を見据えて －

八坂 貴宏 *Takahiro Yasaka*

長崎県病院企業団 長崎県対馬病院 院長

長崎県は全国一の離島県であり、医療資源や医療人材の偏在が顕著であったため、これらを解消すべく地域医療体制構築、医療人材の育成、救急搬送システムや医療情報システムの整備が進められてきた。現在、本土都市部 3 医療圏域を除く、離島 4 医療圏域と県南医療圏域においては、依然人材不足ではあるが、地域基幹病院を中心とした地域医療供給体制が構築されている。

さて、日本は少子高齢化、多死の時代を迎えており、2040 年人口は約 1 億 1000 万人になり、高齢者人口が 3900 万人とピークを迎え、80 歳以上が 15%を占め、単身世帯が 40%を超えると推測されている。高齢者の孤独化、困窮化が進み、1.5 人の生産者で 1 人の高齢者を支える必要があるため、介護人材の不足や医療介護費用の増大から、介護を要する高齢者のケアは困難を極めると予測される。国は、地域医療構想による病床機能変更、病院の再編統合、医療職のタスクシフト、地域包括ケアシステムの構築を謳っているが、新型コロナウイルス感染症の出現により、むしろ改革は進んでいないように見受けられる。

一方、長崎県では 2025 年に、離島地域では 2020 年までに高齢者人口のピークを迎えており、日本の約 20 年先の高齢社会先進地域であるといえる。前述したように地域包括医療・ケアシステム構築も進み、診療看護師（NP）の地域病院での活躍や在宅ケアへの関与も始まっている。

診療看護師（NP）は、専門病院でドクターアシスタントとしての役割を期待されることが多いが、地域病院での総合診療や ER 型救急、地域包括ケアシステムにおける在宅診療の補助や看護、そして介護職員の教育なども期待されるべき役割ではないかと考えている。将来の社会情勢や地域医療ニーズの変化に対応しながら、診療看護師（NP）として、患者からのアクセスの容易さ、質の高い調整力、判断力、技術力、そして社会を看る力を発揮し、地域包括ケアの担い手として高齢社会へ貢献することも期待したい。

【ご略歴】
昭和63年 国立長崎中央病院　研修医
平成2年　長崎県離島医療圏組合上五島病院
平成9年　長崎県離島医療圏組合上五島病院　外科
平成19年 長崎県離島医療圏組合上五島病院　院長
平成24年 長崎県上五島病院 院長、有川医療センター 所長、奈良尾医療センター 所長
平成31年 長崎県対馬病院 院長
【所属学会等】日本消化器病学会 消化器病専門医、日本医師会 認定産業医、日本外科学会 外科専門医、全国自治体病院開設者協議会、全国自治体病院協議会　へき地医療貢献者表彰、平成26年 日本プライマリ・ケア連合学会認定　指導医、平成31年日本病院総合診療医学会　病院総合診療医、他

特別講演 2

診療看護師（NP）への期待と展望
－ 特定行為アウトカム調査研究から －

仲上豪二朗 *Gojiro Nakagami*

東京大学大学院医学系研究科
老年看護学／創傷看護学分野　准教授

地域包括ケアシステムでは、特定行為研修を受けた看護師が、急性期病院と在宅をつなぐ重要な役割を担うといわれています。私自身はこの法改正に係わったものとして、強い思い入れがあります。

この研修は 5 年前に始まり 1,900 人が研修を受け、優れた効果を出しておりますが、評価が個々の施設でされており、政策に反映させるのが難しい状況です。特に診療看護師（NP）の皆さんの真摯な貢献は、日本の医療を大きく前進させるでしょう。そのために必要なのは、統一した効果指標であり政策研究です。今回その指標がどのように作られどのように使われるのか、は皆さんとともに考えたいと思います。

（上記メッセージ：東京大学大学院医学系研究科 健康科学･看護学専攻 老年看護学/創傷看護学分野 教授、グローバルナーシングリサーチセンター長　真田 弘美より）

当日は都合により、仲上准教授が代理として講演を行わせていただきます。

座長 **小野 美喜**
大分県立看護科学大学
成人・老年看護学研究室　教授

座長 **忠 雅之**
東京医療保健大学大学院
講師

特別講演 2

診療看護師（NP）への期待と展望 － 特定行為アウトカム調査研究から －

仲上 豪二朗 *Gojiro Nakagami*
東京大学大学院医学系研究科
老年看護学／創傷看護学分野　准教授

特定行為研修制度が開始されて 6 年目を迎えた。しかし、本制度が医療従事者、そして国民に広く理解、活用されているとは言えない。事実、2025 年までの目標修了者数は 10 万人であるが、3,307 名（令和 3 年 4 月現在）にとどまっている。これは、修了者を臨床でどのように活用すればよいのかの指針がなく、診療報酬で適切に評価されていないためであり、今こそ行為実践の効果を定量できるアウトカム指標を用いて研修制度を評価する時期といえる。そこで我々は、2019 年度より厚生労働科学研究を開始し、アウトカム指標の実施可能性を検証することを目的に「特定行為研修修了者の行為実践によるアウトカム評価のための予備的研究」として、前向きコホート研究を昨年度実施した。その結果、特定行為研修修了者がいる急性期病院では、いない病院の患者に比較して、ADL の指標であるバーセルインデックスが有意に上昇していた。しかし、データ不足のため、特定行為特異的指標や、診療看護師（NP）であるかどうかなどの資格別の解析は不可能であった。2021 年度は絞り込んだアウトカム指標を用いた全国調査を開始する。これにより収集されたデータが、特定行為の実践を評価するベンチマークとなるであろう。これは修了者が存在することによる臨床的効果を定量的に示すことで、診療報酬での評価を勝ち取るための必須戦略である。

日本 NP 学会が学術団体として存在していることの価値は大きい。データをもって NP の必要性と専門性を示し、安全性を確保しながら、患者アウトカムを向上させ、医療の効率化を通して、医療従事者全体の労働環境を改善する効果を客観的に示すことこそが国民が学会に求めていることであろう。今後 NP がどこを目指すべきなのか、どのような看護技術が求められているのかの基礎資料にするなど、データの活用方法は多岐にわたる。日本の医療の在り方の指針となりうる本調査に是非ともご協力いただきたい。

【ご略歴】
2004年　神戸大学医学部保健学科卒業
2009年　東京大学大学院医学系研究科博士後期課程修了（博士（保健学））
2007年－2009年（独）日本学術振興会特別研究員
2009年　東京大学大学院医学系研究科健康科学･看護学専攻助教
2010年　東京大学大学院医学系研究科健康科学･看護学専攻講師
2013年－2014年　カリフォルニア大学ロスアンゼルス校看護学部客員研究員
2017年－東京大学大学院医学系研究科健康科学･看護学専攻准教授
【所属学会等】日本褥瘡学会評議員・認定師、日本看護科学学会理事、日本創傷治癒学会評議員、日本創傷・オストミー・失禁管理学会評議員、看護理工学会評議員、日本老年医学会代議員

01. 交流会 Opening event・Symposium

診療看護師（NP）トーク！
～互いの価値を理解し Collaboration に繋げる！～

11 月 19 日 13:30～14:30
Zoom によるライブ配信（参加費無料）
（後日、Studio3 にてオンデマンド配信予定）

MC：福添恵寿[1)]、岡村英明[2)]、原光明[3)]、後藤智美[4)]
演者：高橋淳[5)]、中澤健二[6)]、中山法子[7)]、福元幸志[8)]
1）JCHO 東京城東病院、2）NTT 東日本札幌病院、3）特定医療法人社団春日会 黒木記念病院
4）東京ほくと医療生活協同組合 生協浮間診療所、5）株式会社 Reha Labo Japan.
6）社会医療法人駿甲会コミュニティホスピタル甲賀病院、7）糖尿病ケアサポートオフィス.
8）鹿児島大学病院

本学術集会のタイトルでもある「collaboration」は診療看護師（NP）の実践において欠かせないキーワードの 1 つです。多職種連携・多職種協働の重要性が叫ばれて久しい昨今ですが、NP という新しい職種は collaboration なくしては実践し得ません。NP の新たな働き方は多様性に満ちており、医師との協働、看護職同士の協働はもちろんのこと、病院内外問わず様々な場面で多くの職種と協働し、今までにないアウトカムへと導くことが可能となります。

今回は臨床経験や活動分野の異なる 4 人の NP をゲストスピーカーにお招き、それぞれの視点から語って頂きます。

1 人目は、高橋淳さん。これまで複数の医療機関で NP の導入に携わってきた経験を活かし、現在は訪問看護ステーションの管理職として現場を支えておられます。2 人目は、中澤健二さん。がん看護専門看護師として活躍後、更なる役割拡大の NP 資格を取得し、現在外科領域を中心に活躍しておられます。3 人目は、中山法子さん。長らく糖尿病看護に携るなかで培った経験を活かして起業され、柔軟な発想で地域住民の健康を守っておられます。4 人目は、福元幸志さん。特定行為研修センターの管理・運営の立場から、看護師の知識と技術の向上、役割発揮を支えておられます。

本企画は、「NP トーーク！」のタイトル通り、メイン MC の福添を筆頭に、サブ MC の岡村・原・後藤が、ゲストスピーカーとともに collaboration について、ざっくばらんに語り合う内容としております。ゲストスピーカー自身の実践にまつわる話はもちろん、価値観や今後の展望、施設や分野、国境をも超えた collaboration についても話題になるかも？！どなたさまでもご参加頂ける懇親・交流のまたとないチャンスです。学術集会のプログラムを思いっきり楽しむべく、どうぞ奮ってご参加くださいませ。

06-パネルディスカッション１（PD1）

診療看護師(NP)/専門看護師(CNS)の多職種協働における役割を解き明かす
- Collaboration における構造やプロセスを紐解く -

Collaboration は、診療看護師(NP)や専門看護師(CNS)といった「高度実践看護師」のコアコンピテンシーである。この能力は、専門化・複雑化した医療現場における多職種協働の場面において特に重要な要素であると言える。

そこで、本企画では、チーム医療の必要性が高まっている現在医療において、診療看護師(NP)や専門看護師(CNS)などの「高度実践看護師」がどのような思考過程（構造）やプロセスで、このコラボレーション能力を活用しているのかを紐解き、高度実践看護師が行う多職種協働における役割を整理していく。

座長 **中村 伸枝**
千葉大学大学院看護学研究院 教授

座長 **黒澤 昌洋**
愛知医科大学看護学部 診療看護師(NP)

PD1-01

看護師であり専門看護師（CNS）であるということ

齋藤 大輔
公立学校共済組合 関東中央病院　ICU・救急外来
副看護師長/急性･重症患者看護専門看護師(CNS)

“医療”における“collaboration”とは何か・・・、辞書や成書による分かりやすい定義はあるものの、“本邦における実務レベルでの具体的な解釈”までに至っていない、体感的理解位に留まっているような印象にある。

本パネルディスカッションでは、専門看護師（CNS）としての私のレンズを通して、実臨床における経験を踏まえ“collaboration”に関する解釈と、今後に私たち上級実践看護師が医療チームにおいてどのように役割発揮すべきか、さらに実践の範囲（scope）を合理的に互いに何を持ち備えていくべきかを述べていこうと考えている。

「医療における看護師の役割とは何か」、このことは私自身の大きな最近の課題で、探究しているところでもあるが、本大会に集まられている数多くの同志の皆様と共に、“これからの本邦のあるべき姿”を創造するためのヒントを共有できたら幸いである。

【ご略歴】
看護師免許取得後、日本福祉大学で福祉経営学を学び、その後聖路加看護大学大学院を修了、2011 年に急性･重症患者看護専門看護師(CNS)を取得
臨床は主に大学病院で ICU、CCU、救命救急センターを経験、集中ケア認定看護師教育過程専任教員も経験
2020 年より地域医療中核病院へ異動、現在に至る

PD1-02

組織を創るための調整と協働
～Advanced Practice Nurse の看護管理者という立場で～

田中 圭
独立行政法人国立病院機構長崎医療センター
医療相談支援センター看護師長　がん看護専門(CNS)

医療の高度、複雑化や、患者、家族の背景やニーズの多様化により、多職種が連携、協働するチーム医療の重要性は年々高まってきている。しかし、臨床では多職種協働における課題も多いのが現状である。専門看護師は問題解決へ向け、多職種協働を円滑かつ効果的に行うために、多職種間を【調整】する役割がある。【専門看護師が行う調整】とは、「必要なケアが円滑に行われるために、保健医療福祉に携わる人々の間のコーディネーションを行うこと」とされている。看護学を構成する用語集によると、調整とは「看護の対象となる人々やケア提供者のために資源を活用する際に、重複を省きかつ効率よく利用するために、便利な組織構造を作るためのアプローチであり、他の専門職と協働するためのアプローチのひとつである」と示され、また「管理機能の重要な要素の一つであり、組織に生じた葛藤や困難ごとあるいは問題を解決し、組織共通の目標を達成するために内部均衡を図っていくこと」とされている。

私は現在、看護管理者、がん看護専門看護師として、組織づくりや地域づくりに携わる機会が多い。今回はあえて【管理機能としての調整】に焦点を当て、私自身[APN の看護管理者]としての意義を模索したい。私は昨年より、看護部のビジョンの基、看護部の組織風土をさらに醸成させるために“関係の質向上ワーキンググループ”を立ち上げ、リーダーを担っている。ワーキンググループの目的は「看護部職員の“関係の質”の向上を図り、信頼しあえるチームを作り、職務満足度を充実させ、定着して働ける組織づくりができる」である。活動は２年目に入り、活動内容も多岐に拡大しながら一定の成果、結果が表れてきている。これらの組織創りを調整・協働に焦点をあて、多職種協働における[APN の看護管理者]としての役割を考えたい。

【ご略歴】
平成14年　ふれあいグループ　康心会　茅ヶ崎デイケアセンター　MSW　入職
平成15年　精神保健福祉士 国家試験取得
平成19年　嬉野医療センター付属看護学校 看護科　卒 看護師国家試験取得
平成19年　九州がんセンター　入職　内科病棟（腫瘍内科、肝胆膵内科、血液内科）
平成23年　九州がんセンター　配置換え　消化管外科病棟
平成27年　高知県立大学大学院 博士前期課程　がん看護学領域　修了
　　九州がんセンター　頭頸科　副看護師長　昇任（配置換え）、がん看護専門看護師(CNS)　認定資格　取得
平成29年　九州がんセンター　緩和ケアセンター　専従看護師　がん看護専門看護師(CNS)、外来、入院のがん患者、ご家族の看護コンサルテーションを担当（緩和ケアチーム・がん看護外来など）
平成31年　長崎医療センター　化学療法センター　看護師長　昇任（配置換え）
令和３年　長崎医療センター　医療相談支援センター係長（患者サポート室・地域医療連携室・予約入院支援室：配置換え）
今回は、平成３０年～活動している組織の風土づくりの活動についてお話させていただきます。

PD1-03

効果的な collaboration を促進する

森 一直
愛知医科大学病院 看護部/麻酔科
診療看護師（NP）

Collaboration は高度実践看護師である診療看護師（NP）にとって基本的な能力であり、実践していく中で重要であることは言うまでもない。この重要なコンピテンシーは、個人や組織の中で臨床実践を促進する反面、阻害要素にもなりうる。患者の高齢化や医療の高度化、専門性が求められている現代において、さまざまな場面で必要とされる collaboration の方法はあまり理解されていないように感じる。Collaboration は多職種との協働の中で、最大限の成果を生み出し、ケアの質を向上させるための方法の一つである。それは多職種間だけではなく、看護師間でも必要である。我々高度実践看護師は効果的な collaboration を促進するために、思考プロセスを構造化し行動に移していかなければならない。

ここでは看護師の役割が多様化している現在において、診療看護師（NP）に求められる collaboration のプロセスを整理していきたいと考えている。

【ご略歴】
2003 年 看護師免許取得
2006 年 愛知医科大学大学院看護学研究科 精神看護学領域 入学（2008 年修了）
2013 年 愛知医科大学大学院看護学研究科 急性・重症患者看護学 高度実践看護師コース 入学（2015 年修了）
2015 年 日本 NP 教育大学院協議会認定 診療看護師(NP)取得
2016 年 愛知医科大学大学院医学研究科 麻酔科学講座 入学（2020 年 3 月単位取得退学）
（職歴）
2003 年 総合上飯田第一病院 入職 整形外科病棟
2005 年 愛知医科大学病院 入職 HCU 病棟
2007 年 同病院 中央手術室へ異動
2009 年 同病院 ICU へ異動
2015 年 同病院 看護部/麻酔科所属
2015 年 愛知医科大学看護学研究科 非常勤講師
2020 年 愛知医科大学看護学部 臨床准教授
（学会活動）
2017 年 日本クリティカルケア看護学会 広報委員
2017 年 日本クリティカルケア看護学会 広報委員長
2018 年 日本 NP 学会理事
2019 年 日本 NP 学会 広報委員

PD1-04

在宅領域の診療看護師(NP)がコラボレーションによって得られる役割

増田陽介
札幌ひがし徳洲会訪問看護ステーション
所長

診療看護師(NP)の活動は病院から地域までと幅広くおこなわれている。訪問看護においては事業所（施設内）や訪問の場面で医師が同席することは少なく、現行の制度（特定行為研修制度）においては、特定行為については手順書に定められた行為は実施できるものの、病院等において医師の管理下のもと行える多彩な手技や診療補助行為を行う場面は少なくなる。加えて診療所や病院に付属しない訪問看護ステーションでは、多施設の医師との連携や協働することに難しさがあり、役割を理解してもらうことが困難なこともある。当事業所のある札幌市でも、地域の診療所や医療機関における診療看護師(NP)の認知度には偏りがあり、役割を理解している機関には限りがある。

一方で、医師が同一施設・家屋内にいない状況で診察、判断を行う場面も多くなり、情報共有は行うが、医師の診察に先行して診療計画を変更することもしばしばみられている。診療看護師(NP)の役割を理解してもらうことにより、対面などで直接管理を行わない医師（同一組織外の医師）とのコラボレーションを駆使した診療や治療、病状管理においても効果的な結果を得られる可能性があることを実感している。

このセッションにおいては、在宅領域における診療看護師(NP)と医師やその他の職種とのコラボレーションについて病院に在籍している診療看護師との対比を踏まえながら、制度上の問題や得られる効果について議論をおこない、コラボレーションによって得られる診療看護師(NP)の役割について、示唆を得る機会となることを期待したい。

【ご略歴】
2000 年 北海道医療大学看護福祉学部卒業
2017 年 北海道医療大学院 NP 養成コース卒業
札幌東徳洲会病院にて診療看護師として従事
2019 年 札幌ひがし徳洲会訪問看護ステーション　管理者　現職に至る

PD1-05

多職種協働におけるプライマリケア診療看護師（NP）の役割 保健医療福祉分野コンピテンシーを用いた考察について

谷山 尚子
社会医療法人関愛会大東よつば病院/佐賀関病院 兼務
診療看護師(NP)

【はじめに】近年、我が国の医療提供体制は従来の病院完結型から地域完結型への転換が図られ、高齢化の進展は医療介護ニーズの増大・複雑化・多様化に拍車をかけている。従来、病院では治癒や退院といった比較的明確な目標設定のもとチーム医療が展開されてきたが、近年は生活課題の多重問題化により地域でも多職種協働が重要視され、その必要性は一層高まっている。そんな中、診療看護師（NP）は多職種協働におけるキーパーソンとしてその役割が期待されており、演者も在宅医療における様々な活動を行ってきた。今回、演者が実践した職種横断的活動をもとにNPの多職種協働における役割を考察したので報告する。

【方法】分析的枠組みとして医療保険福祉分野の多職種連携コンピテンシーを用いて介護老人保健施設における職種間協働関係の現状をアセスメントし協働の阻害因子を抽出した。その後、問題解決に向けた介入を計画・実施し、文献を参考に一連のプロセス下におけるプライマリ・ケアNPの役割を検討した。

【活動内容】協働阻害因子として【①NP自身の役割認識不足】【②自職種における専門性の認識不足】【③職種間役割の認識不足】【④目標設定が不明瞭】【⑤振り返りの欠如】が抽出された。その後、ワークショップによる協働関係の基盤作りを行い、目的別チームの立ち上げ・カンファランスの導入など協働活動の発展に至った。

【考察】多職種連携コンピテンシーは学習により修得可能な能力である。今回NPが調整役を担うことがチームメンバーの連携の必要性と自他職種への理解を深め、各々の役割を全うすることでチームの成熟度を高めることに有用であった。活動の中にはNPとして医学的な観点から運営を支えることもあったが、一連の過程で必要だったのは調整能力・教育的役割・研究活動、そしてリーダーシップを発揮する能力であり、現場から求められる能力は専門看護師と相違はないと考えている。

【ご略歴】
平成18年 大分大学医学部看護学科　卒業
平成18年 大分県立病院　入社(平成20年 退社)
平成20年 社会医療法人関愛会　佐賀関病院入社　産業保健師として採用
平成25年 大分県立看護科学大学NPコース入学　外来/救急外来へ配属
平成27年 大分県立看護科学大学NPコース修了
平成27年 社会医療法人関愛会　診療看護師として活動開始　一般病棟/救急外来へ配属
平成28年 訪問看護ステーションいろはへ配属
平成28年 介護老人保健施設せきの郷配属
平成29年 佐賀関病院/佐賀関診療所へ配属
平成30年 よつばファミリークリニックへ配属
令和2　年 佐賀関病院/介護老人保健施設せきの郷へ配属
令和3　年 大東よつば病院/佐賀関病院へ配属. 現在に至る

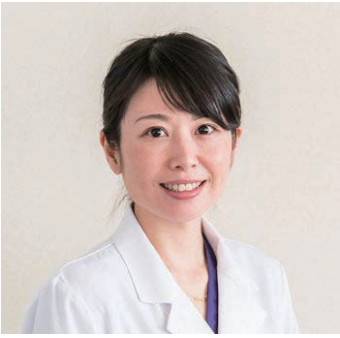
11-パネルディスカッション２（PD2）

診療看護師(NP)に求められる戦略的思考と政策提言
－ 診療看護師(NP)として道を切り拓く/
診療看護師(NP)のいま・これからを戦略的に考察しよう －

診療看護師(NP)にとって、国家資格化や診療報酬の獲得、資格認知度の低さなど、課題は多く存在する。長崎県の離島などの僻地においては医療人材不足、医療の偏在など様々な課題が生じており、そのような医療現場での診療看護師(NP)の存在（介入）は、実践活動からも高く評価されているが、診療看護師(NP)の絶対的人数の確保、必要とされている場所への定着などの課題を考えると、まだまだその需要と供給のバランス、診療看護師（NP)の社会的立ち位置の整備は不十分であると言える。このようなジレンマは、決してへき地医療の領域だけではなく、様々なシチュエーションで診療看護師(NP)自身、診療看護師(NP)に関わる関係者が医療現場で経験していると思う。

本企画では、いま、これからの診療看護師(NP)の未来に向けて、根底にある情熱や戦略的思考（政策提言案）などを出し合いながら、1. 医療政策的にどのような仕組みの中で、診療看護師(NP)が医療現場/社会に貢献できるのか。 など、様々な立場の方からの提言/発表を通じて、戦略的思考を培う必要性を認識できる機会としたい。また、得策として国家資格化、診療報酬制度などの整備があげられるが、本企画では本件に関しては思考のゴールとはせず、あくまでも考える力を養う、そして考えることの重要性を認識してもらう機会としたい。パネリストの方々と共にセッションを通じて、創造（イマジネーション）力を養い、診療看護師(NP)という存在をどのような仕組みで医療業界にコミットさせることができるのか。一緒に考えたいと思う。

座長 **重冨 杏子**
東京ベイ・浦安市川医療センター
診療看護師室　主任診療看護師(NP)



座長 **八坂 貴宏**
長崎県病院企業団 長崎県対馬病院
院長